

愛宕さんが僕を甘やかせて虐めて蕩けさせる
テングコテング

DOJIN
R18
成人向け



僕は、頭が良い。

15歳という若さで、提督に任命され、
一週間前この鎮守府に配属された。
両親からは神童だと言われているし、僕もその通りだと思う。

長男として、日本男児として、僕はその期待に応えるべきなのだ。
その為に、提督として、この鎮守府で立派に役目を果たしたい。

僕は若くて賢い分、周りから嫉妬されることがある。
そんなくだらない奴らはどうでもいいのだが、人の上に立つ以上
対策も必要だ。

秘書官は愛宕に務めてもらうことにした。

愛想が良く、朗らかで、能天気で。

僕は少々愛想がないので、ちょうど良い。愛宕なら、周りとうまく
関係を結び、僕のフォローをするだろう。

だが、

愛宕は妙に馴れ馴れしい。
提督である僕の体をべたべた触ってくる。
怪訝な顔をすると、あの甘い笑顔でより触ってくる。

ふわふわの髪から甘ったるい香りをさせて、
ばかでかい胸を押しつけ、僕に密着する。

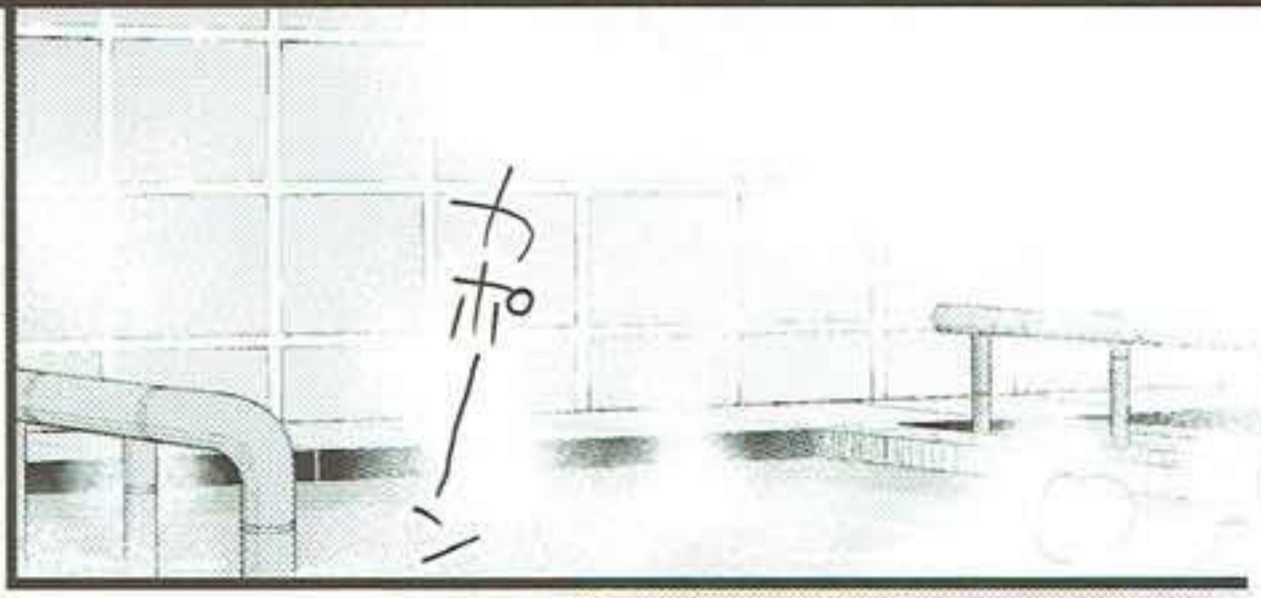
くだらない奴らなら、喜ぶところだろう。
だが、僕は違う。そんなくだらない人間じゃない。

今夜こそ、愛宕にびしっと言ってやらなくては。
僕は、周りとは違うんだと。

全く…
愛宕と一緒にだと
調子が狂う

あんなに甘ったるい匂い
させやがって…

僕のと全然違う…



ガ
ラッ

「提督♡
今日も一日
お疲れ様♡」
「お背中
流しまあ〜す♡」

むちっ

「なっ…!!?!!
いいっ!!入ってこるな!!」
「うふふ♡
これも秘書官の務めよう々
ね、提督、いっぱい泡立てて
隅々まで…洗ってあげる
きつとね…気持ちいいんだからあ♡」
「ごく…
気持ちいいの…か
「そ、それより
なんだその恰好は!?!」

「これ〜?濡れてもいいように
ちよつと頑張っちゃた♡
どうです?似合うかしら〜?」

うわ…乳首…
いや、にゅ・乳輪はみ出て
むちっ

いつも着てる服の下
こんなのが隠れてる
のが…ごく

あ……
気持ち……いい
しゃん

しゃん

しゃん

しゃん

「提督♥
目、染めてない？」

しゃん

「ああ……うっ！」
大丈夫……うっ！
ご……す……
下から間近で見ると
大きくて……
泡で濡れてるから、
なんかつツツヤ
テカテカして……
柔らかいのか……？
重いのかな……
どんな感触なんだ……

たぷん

たぷん

しゃん

しゃん

「……提督♥
じゅつと見て……うふふ
気になるう？」
「い……い……別！」

「提督の命令なら……
い……う……ばい♥触って
揉んで……い……い……の……に♥」
「うあ……め……」

たぷん

「命令!!」

「あん♥」

「んもう〜 もみゅ もみゅ
意外とおっぱい…好きなのですね♥」

ズ…
スルッスルッ♥

「だ・黙って
命令をき・聞け」
愛宕のおっぱい…
やわらか…っ

乳首っ!!

「あん♥
はみ出ちゃった…♥
提督? 乗せちゃって
ごめんなさい」

「お詫びに…
先っほも♥
提督の好きにして…
くださいね♥うん」

しゅん
たぶん

しゅん

おっぱいの重さで
息苦しいのに…
頭も気持ちよくで
…とける…

もみゅ

もみゅ

しゅん

「ん…♡
ちゅっちゅ♡
ちゅっちゅ♡
ちゅっちゅ♡」

「ちゅっ♡
ちゅっ♡
ちゅっ♡」

「おちんちん
気持ちいい?」

「提督のおちんちん
カチカチ…♡うれし♡
わたしの乳首も…
かたくなってるの…
わかります?」

「きもちいいと
…勃っちゃう♡
提督とお揃い…♡」

ちゅっ
ちゅっ

ちゅっ
ちゅっ

ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ

「ん♡提督♡イキたい?
ぴゅっぴゅっしたい?」

「あたごお!!」
きもひらひら!!
キキキキ

「ぴゅっぴゅするまで
手とめないから♡
きもちよろしく
イっちやあ♡♡」



ビュッ
ビュッ
ビュッ

ビュッ

ビュッ

ビュッ
ビュッ
ビュッ

「んう
~~~~~  
っっ!!!」



「ね、提督  
ぴゅっぴゅっ……手だけで  
い〜の?」

「……提督♥いっぱい♥  
おちんちんから出せて……」

「えらいです♥♥♥」

……ド

「手……  
おじまひん」

「もあ〜っ♥  
ぴゅっぴゅっ……  
させたいかも……♥」

「な・なら……  
一つ命令がある……」

フッ  
フッ

……ド

……ド







「さっき、わたしの手で  
ぴゅっぴゅっ♡したより…  
もつと…気持ちいいこと  
今から…しましようね♡」  
「あ…  
あれより気持ちいいこと…」

さっきの射精が  
今までで、一番…  
気持ち良かったことなのに  
あれよりなんて…

「提督♡  
目がとろ〜んって  
してます…♡  
期待…してあげな  
うふふ♡」

「い、いいからっつ  
早く気持ちいいこと…  
しろっつ」  
「あん、このままじゃ  
出来ないわよ〜」  
「くっ…」

「あ…  
丸見えになっちゃった♡」

「もうっつ  
出来るだろっ!?!」

「今までに  
経験したことない  
気持ち良さ…♡  
愛宕のせ〜んぶ使って」

「提督のおちんちんに  
経験させますね…♡」



おちんちん  
おちんちん  
おちんちん  
おちんちん



「うっ♡  
は♡  
あ♡  
ふああっなんだ  
これえっ!!!  
ちんこがっ  
おかしくなってるっ  
「ひっ♡ひっ♡ひっ♡」

「提督…♡  
目開けてえ♡」



「提督のおちんちん見えるっ♡」



おちんちん  
おちんちん  
おちんちん

「提督のおちんちん見えるっ♡」

「あ…あ♡  
あ♡♡♡」

「じゃあじゃあ…  
気持ちいいよね♡  
うん♡♡」

「おちんちん…  
蕩けちゃう?」  
「とろけちゃううう」

「うん♡」







「わたしも  
提督とせっくすするの……  
きもちいい……♡」

はんっ♡

「提督とのせっくす……  
大好きに  
なっちゃう……♡」

「あたごっ!!  
俺もっ  
せっくす好きっ」

「あ♡  
提督が……  
せっくす  
覚えちゃったあ♡」

「そのまま……ぴゅっぴゅ  
ぴゅっぴゅ♡して♡♡  
海の中にもぴゅっぴゅっ♡」

「一緒に♡ね♡  
私もイク♡からあ♡♡」

はんっ♡









「は……は……」

「ぎもちい♡  
提督よりも  
お姉さんだから  
我慢してたの……♡  
イっっちゃったあ♡」

「は……はあ……  
提督のこと……♡  
もっつと……♡  
好きになっちゃう♡」



後日

「ばんぱかぼくん♡

はい、愛宕からのプレゼント♡」



「だせっ!!  
こんなん  
着れるか!?!」



「んもう  
よく似合って  
かわいいのにい〜」  
「かわいいうって言うな!」  
「だと思って〜...」  
「実はもう一つ  
プレゼントがあります♡」



「おちんちんの先っぽを  
これでしゅりしゅりって  
くりんくりんって  
したら...♡  
すくすく...♡  
気持ちいいかも...♡♡♡」

「男の子でも...  
何もなくて...  
じゅっとなんて...  
わたしが動かして...  
気持ちよくて...♡  
おちんちん蕩けちゃうの♡」



「提督♡」

「今夜は...♡  
おれで...♡♡♡  
ピュッピュ♡  
しましやうねえ♡」

「わたしは...♡  
提督を蕩けさせるぞ♡♡♡」

「わたしは...♡  
提督を蕩けさせるぞ♡♡♡」



「は...は...はあ♡  
あ...♡♡♡」

「提督♡」



なんなんだ、あの道具は  
愛宕の顔を見ながら、香りをかぎながら、あの指であんな道具  
動かされたら……

多分、僕何度も…みっともなく…果ててしまうだろう。

違う。こんなはずじゃない。  
僕は頭が良くて、人の上に立つ男で

そうなのに  
そのはずなのに……

早く、夜が来ないかな  
今夜も…きっと

愛宕が僕を甘やかさせて虐めて蕩けさせる。



